

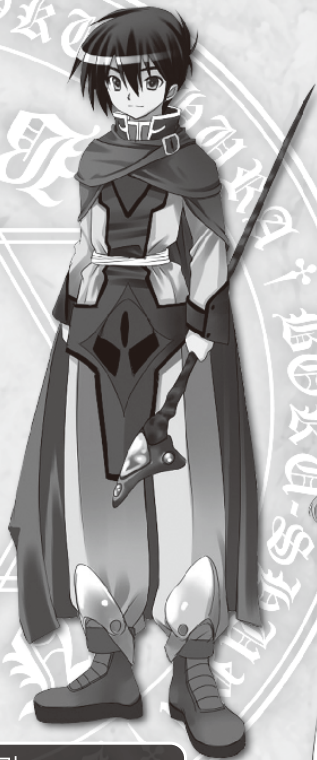
僕のパーティーが修羅場すぎて 世界が救えない2

上田ながの
挿絵／高瀬むう



立ち読み版

登場人物紹介



ヤマト

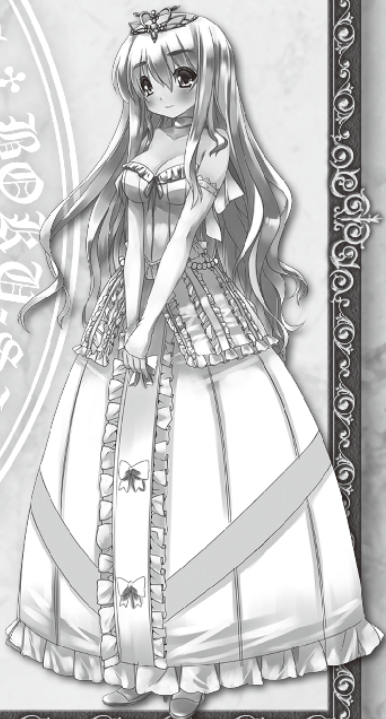
職業：魔術師

王宮に仕える魔術師
で、気の優しい少年。

スウィーナ

職業：王女

アスカテリーナ王国
王女で、ヤマトの許嫁。





アル

職業：司祭

国内屈指の神聖
魔法の使い手で
ある天才少女。

セレスティア

職業：勇者

天界の神に選ばれ人知
を超えた力を与えられ
た元村娘の少女。

リナリー

職業：剣士

王国一番の剣の使い
手。ヤマトとは幼馴染
みで頼れる姉的存在。

白い肌に青い水着が映える。大きな胸に対し、少し小さな水着。いわゆる三角ビキニという奴だ。この為、下乳がはみ出して見える。ムチツと揺れる谷間。普段の鎧とそれほど露出が変わるわけではないが、どうしてこれほどまで魅力的に映るのだろうか？

リナリーの問いかけに言葉で答えることができず、コクコクと無言で頷く。

「こ、こんなところで水着なんて信じられませんか」

その反応に対し、セレスが少し焦った様な言葉を漏らした。

「そそ、そうだよ。だいたい……その身体でビキニって……ちよつと酷くない？」

アルも勇者の後に続く。少女司祭はわざとらしくリナリーの股間部を見た。

「く、こ、ここは見るなっ!!」

視線を感じたリナリーはすぐに秘部を手で隠すが、その直前にヤマトはそこを見てしまう。水着に隠された幼馴染みの大事な部分は、不自然なくらいに膨らんでいた。本来女性にはないはずのペニスの形に――。

「だ、誰のせいでもうなったと思ってるんだ!!」

リナリーはアルに対して怒りを向ける。この言葉通り、彼女の股間に肉棒が生えるきつかけを作ったのはアルだった。魔族四天王の一人と戦った際にアルが使った神聖魔法の後遺症である。リナリーが現在スカートを穿いている理由もこれだ。

「ど、どうする？ 鎧に戻す？」

流石にこのまま行動するのはリナリーも恥ずかしいだろう。

「いや……なんかこれ着てみたら確かに身体の調子がいい。これなら今まで以上に動けそうだからこのまま行くよ。スカート穿いてれば問題ないしな」

女剣士は笑いつつ、水着の上からスカートを穿き、剣を腰にぶら下げた。確かにこれなら問題なさそうだ。

「……動ける様になったからなんだっていうんですか……ヤマトさんの役に立てるのは私なんですから」

これを見てポソリッとセレスが呟く。アルはというと……。
何故か水着姿のリナリーを見て笑っていた。

*

魔法の水着の効力は、すぐに発揮されることとなる。

「はああっ!!」

ダンジョン内にて現れたモンスター達は、そのことごとくがリナリーの剣によって切り裂かれることとなった。敵に反応する間すら与えない、閃光の様な剣戟^{けんげき}。リナリーの戦い
は見慣れているはずのヤマトですら見惚れてしまう。

「凄いねリナねえ」

「なっはっはっは！ まあな。すげーよこの水着。これならアタシ一人で十分だな」

腰に手を当て、リナリーは笑う。

「調子乗りすぎです」

この反応に対し、セレスはイラついたように呟きながら、ギリギリと爪を噛んでいた。ちよつと怖い姿だったが、これがあながち嫉妬だけとはいきれない。実際リナリーはかなりハイになっている様にも見えた。それだけ水着による効果が凄いのだろう。敵が出てくるたびに、自ら進んで前に出て、セレスやヤマト、アルが手出しする前にすべて叩き斬ってしまった。

「いや、快調快調！」

ニコニコと幼馴染みは笑いながら腕をぶんぶんと振る。戦いにおいてこういう油断はかなり危ない様な気がした。とはいえ、リナリーが喜んでいるのを見るのはヤマトも嬉しく、自然と笑顔となる。これが為に、セレスなんかはダンジョン奥へ進めば進むほど、不機嫌さを増している様だった。それに比べ、アルは先程から異様に静かである。いつもの彼女ならこういう時には真っ先にリナリーに喰ってかかりそうなものなのだが……。

「どうかした？」

「ん？ 別に何でもないよ」

少し心配になったので尋ねると、アルはにっこりと微笑む。無理をしている様には見えない。どうやら本当になんでもないようだ。いや、それどころかむしろ機嫌がいい様にも

見える。旅が順調だからだろうか？ なんとなく腑に落ちないものを覚えた。

一行の前に多量のスライムが出現したのはそんな時のことである。数は数十にも及ぶ。

(流石に一人で相手をするには多いなあ。でも……)

スライムならば魔法で焼き払ってしまえば問題ない。ヤマトは杖を構えようとする。

「あれ？ リナリー戦わないの？」

これまで大人しくしていたアルが口を開いた。

「何？」

「だってさつきまで私一人で十分とかいってたじゃん。なのにここはお兄ちゃんに働かせるつもりなの？ もしかして楽な仕事だけして、大変な仕事は押しつけるつもりなの？」

別に責める様な口調ではない。ただ、ニヤニヤと笑っている。

「はあ？ 何言ってるんだよ。こういう時はヤマトの魔法の方が効率いいだろ」

「……確かにそうかも知れませんが。それじゃあヤマトさんが都合のいい人みたいじゃないですか」

ここにセレスが乗っかる様に口を開いた。勇者と司祭が小馬鹿にしたような表情を戦士へと向ける。二人はそれ以上何もいうことなく、ジッとリナリーを見つめ続けた。

「あ、その……僕は別に……」

「お前は黙ってる……」

口を開くが、リナリーに遮られてしまう。普段他人の挑発になどあまり乗らないタイプなのだが、水着の効力による調子の良さが残っている為なのか、すっかり二人に乗せられてしまっている様に見えた。

「人が大人しくしてれば勝手なこといいやがって……。いいぜ、やってやるよ。そこで見てろよ」

カキンツとリナリーは剣の鯉口を切る。

「ちよっ——」

いくら調子がいいからとはいえ、敵はあまりに多い。ヤマトはリナリーを止めようとしたが、その瞬間、突然肉体を魔力が包み込んだ。肉体が硬直し、一切の身動きが取れなくなってしまう。

「え、こ、これって？」

「……リナリーさんが一人で戦うといっているんです。ここは見守ってあげましょう」
にっこりとセレスが笑った。どうやらこれは彼女の魔法によるものらしい。

「いや、で、でも……」

「そうだぞ。そこで見てろ」

なおも食い下がろうとするが、リナリー自身が軽いい放ち、敵に突っ込んでいく。
ヒュインツ!!

尋常な速度でない剣戟けんげきが振るわれた。一閃した刃が、スライム達を切り裂いていく。まるで剣舞でも舞っているかの様に素晴らしい剣技だった。一瞬ヤマトも状況を忘れて見惚れる。

しかし、やはり多勢に無勢だった。スライム達が一齐に動き出す。

「チイツ！ はあああああつ！」

数十匹のスライムが宙を舞い、リナリーへと飛びかかった。

「リナねえ!!」

嫌な予感がして声を上げるが、それくらいのことしかできない。リナリーはこちらの叫びには答えず、剣を振るって何匹かのスライムを迎撃した。とはいえ、数十匹をすべて斬ることはできない。何十匹もの魔物が、リナリーの肢体に取り憑く。

「こ、このっ！」

慌てた様にリナリーは身をよじり、スライム達を振り払おうとしたが、粘着質な魔物はぴったりと肌に吸い付いている様で離れない。それどころかゆつくりと動き出し、リナリーのスカートの中へと潜り込んでいく。

「ちよっ！ やめっ!!」

幼馴染みの顔に驚きの表情が浮かぶ。もちろん、驚いたからといってスライムが止まるわけでもない。

にちよつにちよつにちよつにちよつ……。

「んひつ！ あつあつ！ そ、それはっ!? ひつ、ひんんんん」

スカートの中から何やら水音が響き始める。途端にリナリーの口から嬌声にも似た悲鳴が上がった。ガクガクと膝が震え始める。やがて立っていることもできなくなってしまうのか、リナリーは尻餅をつく。当然捲れるスカート――。

「ちよ、あれ！ な、何？ え、なんでスライムがあんなこと!?!」

ヤマトの視界に映ったリナリーの秘部には、多量のスライムが纏わり付いていた。水着の中から勃起した肉棒がはみ出している。スライム達は勃起棒に絡みつき、扱き立てる様に蠢いていた。

「お、おほっ！ ちよ、は、はなれっろ!! んひつ！ あ、あんんん」

顔を赤く紅潮させながら、幼馴染みはスライム達をなんとか引きはがそうと手を伸ばす。流石に自分の身体に剣を向けるわけにはいかないのだろう。ぐちゅつとペニスに絡んだ一匹のスライムを握る――。

「おっひいっ!!」

途端にリナリーの表情は更に歪んだ。ペニスをより強く締め付けられた為か？

「ど、どうなってる？ あんなの聞いたこともないよ」

見ていることしかできないヤマトは戸惑った。スライムがああいう形で人を襲うなんて

文献でも読んだことはない。

「あー、今気付いちやっただけ。なんか、あの水着やっぱり呪われてるみたい。なんかモンスターを興奮させて、強制的に発情状態にしちゃうみたいだ。」

するとこれに答える様に、アルが棒読みでそんなことを呟いた。

「あ、アルッ！ て、てめ、ど、どういふつもりだよっ！ んはあっ」
当然これはリナリーの耳にも届く。

「どういふつもりも何も、ごめんね。気付かなかったから。天才にもミスはあるんだよ」
てへぺろつと少女司祭はわざとらしくコツンツと自分の頭を軽く叩いてみせた。

「き、気付かなかったって、う、嘘つくんじや——くひっ！ ちょ、お、おまえらやめつろ！ そ、それ以上されたら不味い。不味いからっ!!」

じゅっごじゅっごじゅっごじゅっごじゅっごっ！

スライム達はひたすら肉棒を抜く。同時に身体中に取り憑き、リナリーの肌を吸引し始めた。もちろんペニスだけでなく、秘部にも絡みつき、肉壁にも刺激を与え出す。

「り、リナねえ……」

幼馴染みが目の前で穢されていく状況に、ヤマトの股間は不覚にも硬くなってしまった。
「み、見るなっ！ ヤマト見るなあっ!!」

リナリーは半泣きになって首を左右に振る。ただ、同時に空腹も振ってしまっていた。

想像以上にスライムによって与えられる快感は大きいらしい。実際勃起した猛りは大きさを増している。肉先が破裂しそうなくらいに膨張しているのが見えた。魔物は膨れあがった亀頭部を重点的に責めていく。

「お、ちよ、そつれ、それ以上されたら……あつ、あつあつあつあつ……」

女の部分と男の部分——両方を同時に責められ、女剣士の肉体は絶頂へと上り詰めていく。魔法で作りに出された肉棒は普通より敏感らしく、抵抗をすることもできないらしい。

(リナねえの、あ、あんなに大きくなってる……)

半透明なスライムに包み込まれるペニスは、ヤマトのものよりも大きくなっていた。

そして——。

「んひああああああ！ で、射^で精^ちる！ 射^ち精^まちまううっ!!」

ぶびゅぽつ！ どびゅぽおおおおおつ！

「いっく！ おつおつおつ、いくううう!!」

全身を激しく痙攣させながら、リナリーはスライムの中へと大量に白濁液を撃ち放つ。真つ赤に染まる顔。全身から汗が噴き出す。

(い、イッた……スライムなんかでリナねえが……)

ズキンツと胸が痛む。正直見ていられなかった。

「あゝひどい。ヤマトさんって大切な人がいるのに、最低ですね」



「許せません！」

「え、せ、セレス？」

そこで会話に勇者が割り込んできた。いつから聞いていたのか分からないけれど、彼女の表情は怒りに燃えている。もともと世界を守る為に旅立とうと決意するくらいの少女であり、正義感是非常に強いのだ。

「まったくだな。反吐が出る」

「アルだつて放つておけないよ」

険悪状態だつたりナリーとアルも、いつの間にか喧嘩を止めて話を聞いていたらしい。

「……みんな」

全員の瞳に怒りの色が灯っている。なんだか久しぶりにパーティーが一つになっている様に見えた。ジーンと暖かいものを心を感じる。みんなで見つめ合い、頷き合った。

「その……僕達に任せて下さい！」

必ず町を救ってみせる。みんなと一緒に……。

グッとヤマトは拳を握りしめた。

*

竜退治の為の策は単純である。

即ち、普通に結婚式を行い、そこに竜がやってきたところを倒す——というものだ。単

純であるが故に、成功率は最も高いだろう。とはいえ、普通にあの泣いていた二人に式を挙げさせるわけにはいかない。それは危険だ。というわけで、ヤマト達勇者一行が、新婦に化けて竜を誘き寄せることとなった。

当然新郎役はヤマトである。ここまでは順調に決まった。が、問題はここから先、新婦役の人選だった。

「当然アルだよね？」

エッヘンと少女司祭はない胸を張ってみせる。根拠がどこにあるかは分からないが、とにかく凄い自信だ。

「いや、それはないだろ」

しかし、リナリーが一言のもとに切って捨てる。なんか感情が籠もってなくてちよつと怖いんだけど……。

「それはないってどういうこと!? 可愛いお嫁さんになれるのなんてアルだけじゃん!!」
フンツと少女は鼻を鳴らす。これに対してリナリーは、ハンツと鼻で笑った。

「そりゃないない。こういうのは子供にできる仕事じゃねーの。アルなんか新婦役をやってみろ、一発でばれる。囃役なんかできっこないの」

やれやれこれだからお子様は——というアルを小馬鹿にした雰囲気かブンブンと漂う話し方だった。アルは「な、な、ななな……」と言葉に詰まりながらプルプルと震える。そ

んな彼女を無視して――。

「とうわけだから四役はアタシに決まりだな」

「なな、なんでそうなるの!？」

「なんでって、アタシならヤマトと並んでいても違和感ないだろ。いいか、アルとヤマトじゃ保護者と娘……よくて兄と妹……とても新郎新婦にや見えねえ。だろ?」

「う、そ……それは……」

身長差に関しては否定できない現実だ。どんなことでも常に自信満々な天才少女でも口籠もる。これは幸いとリナリーは腰に手を当てて「がははは」と豪快に笑った。

ギスギスしたパーティーの中でも一番の大人で、引くべきところは引くりナリーにしては珍しい態度である。よっぽど洞窟での一件が腹に据えかねているのだろう。

「……でもリナリーさんも駄目ですよね?」

セレスが口を挟んだのはこの時のことだった。

「どういう意味だよ?」

勝ったつもりでいたところに冷や水をかけられ、リナリーはムツとした表情を浮かべた。

「どういう意味って……そのまんまの意味ですよ。リナリーさんではお嫁さん役は無理だつてことです」

「あ、アタシのどこが無理なんだよっ!!」

「どこ？ 分からないんですか？」

フウツと呆れた調子でセレスはわざとらしく息を吐く。

「リナリーさんみたいな野人じゃヤマトさんのお嫁さんはできないっていつてるんです」

「や、野人ッ!？」

ガンという効果音が聞こえてきそうなくらい、女剣士は驚いた。色々酷いことをいわれるだろうと予想はしていても、野人呼ばわりされるとは思ってたのだらう。

「どどど、アタシのどこが野人だっていうんだよ!？」

「どこって……全部ですよ。まずその言葉遣い。乱暴すぎます。私達が皆様の希望を背負っていることを理解していますか？ 私達は皆様の模範になるべきなのです。それなのにがさつで、何かというとすぐに剣を振り回したり……血の気が多すぎます」

「そ、それがどうしたっていうんだよ！ 確かにアタシの言葉遣いが悪い。一応剣士だから剣を振り回すつても認める……。だけどなあ、それだけで野人呼ばわりされるいわれはねーぞ！」

「いいえ、リナリーさんは野人です。これがその証拠」

そういつて一枚の紙をセレスは取り出す。

「なんだそりゃ？ よこせっ！」

ひったくるようにリナリーはその紙を奪い取った。ヤマトとアルもなんとなくその紙へ

と視線を移し——。

「ぶっ」

二人同時に吹き出した。

紙には道端で草を引き千切り、それを食べているリナリーの姿が写っている。

「ななな、なんだこれっ!!」

「何って私が念写したりナリーさんの真の姿です。念写絵です」

「ね、念写って……」

勇者だけあってなんでもこなせるセレスだが、いつの間にかそんな能力まで獲得していったらしい。念写絵師というのは世の中に結構いるけれど、あれってちよつと勉強しただけで覚えられる代物ではない気がするのだけれど……。実際ヤマトも使えないし。

「因みにこれは一昨日おとといの光景です」

「お、一昨日って……リナねえ……ど、どうして?」

確かにパーティーがバラバラになり、自分の食事は自分でしか作らない——ヤマトの分は作ってもらえる——時期に、料理ができないリナリーはその辺の草を食べていた。が、流石にそれは可哀相であり、食事くらいはみんな平等に食べようとヤマトが提案。食生活問題は解決されたはずなのに……。

「し、仕方がなかったんだ……」

まるで犯行を暴かれた犯罪者の様にリナリーはその場に膝をつく。

「仕方がないってどういうこと？」

「……忘れられなかったんだ。その……草の味が……く、す、すまない……」

がっくりとリナリーは項垂れる。どうやら草食生活がすっかり癖になってしまっていた様だ。ぼろぼろと女剣士は涙を零して泣く。

「リナねえ……」

なんだかこつちまで泣きたくなる様な姿だった。

「そういうわけです。こうなった以上……お嫁さん候補は私しかいませんよね？」
女勇者は勝ち誇る。

*

翌日、ヤマトとセレスはタキシードにウエディングドレスという姿で、町外れに用意された式場に立った。司祭と新郎新婦三人というごちんまりとした式である。

「ぐぐ、く、悔しい。悔しいよ」

「……はは、どうせアタシは野人さ……」

アル、リナリーの二人は竜に悟られない様に少し離れた位置からこの光景を見つめていた。アルは血が滲むほど唇を噛み締め、リナリーはその辺の草を引き抜いている。

その二人の様子には気付かず、ヤマトとセレスは腕を組みながら祭壇へと向かった。

「やっこの日が来ましたねヤマトさん」

うっとりとしてセレスが話しかけてくる。

「こ、この日が来たって……えっと……これがお芝居だつて分かつてる？」

「もちろん分かっていますよ」それで、子供は何人欲しいですか？」

「え……あ、あはははは……」

アルとリナリーも見てることを考えると、乾いた笑いしか出てこない。そんな状況で司祭の待つ祭壇に到着する。

司祭は聖書を開きつつ、祝福の言葉を述べた。正直本当に結婚式を挙げているかの様な気分になってくるが、仕事を忘れてはならない。

(いつ来る?)

限界まで魔力探知幅を広げ、竜の襲撃に備えた。

「……さん、や……とさん？」

「——え？」

その為、セレスに話しかけられていたことに気付くのが遅れる。

「な、何？」

「何じゃありませんよ。誓いの言葉です」

「へ？ あ、そ、そうだね」

司祭がこちらを見ていた。

「新郎ヤマト——汝は新婦セレスティアを生涯愛することを誓いますか？」

「え、あ……その……」

期待を込めた視線をセレスが向けてくる。初めて会った時と変わらない美しい顔立ちだ。あの日、ヤマトは必ずセレスを守り抜こうと誓ったことを忘れていない。今も気持ちに変わりはなかった。

「駄目だよお兄ちゃん！」

「や、ヤマトお」

もちろん仲間達の声は届かない。

「ち、誓います」

改めてセレスは守り抜くと心の中で誓うと共に、司祭の言葉に答えた。これを聞いたセレスの表情が輝く。

「では新婦セレスティア——汝は新郎ヤマトを生涯愛することを誓いますか？」

「誓います!!」

当然の如くセレスは頷く。

「では誓いの口付けを」

ヤマトはセレスと向かい合う。ヴェールを捲り、ジッと彼女を見つめた。艶やかな唇を

どうしても見してしまう。

(リナねえとアルも見てるけど……)

二人の前でセレスとキスをするのは流石に気が引ける。だが、これは町を救う為なのだ。もし芝居がばれてしまえば、竜によってこの町は滅ぼされてしまうかも知れない。

(し、仕方がないよね)

自分にいい聞かせ、セレスの唇に唇を重ねた。

「んっ」

柔らかな感触と、温かな体温が伝わってくる。ただ唇を重ね合わせているだけでも、心と心が繋がる様な心地よさを感じた。いつまでもこうしていたいという欲求すら覚える。

(でも駄目だ……)

今は大事な式の最中。長々とキスをしているわけにはいかないので、重ねていた唇を離そうとするのだが、ヤマトの首にセレスの腕が巻かれた。

「んちゅっ！ んちゅうう」

「——!? ん、んふううう」

同時に口腔にセレスの舌が挿し込まれる。ニチュツという唾液と唾液が混ざり合う音が聞こえた。舌に舌が絡まる。

(せ、セレス!!)



「もちろんそれはアルだって分かってる。だから、お兄ちゃんに抱かれて助かるのなら、今回だけは譲ってあげてもいいとも思うんだけど……アルの責任でもあるしね……でもそれじゃありナリーは治らない」

「な、治らないってどういうことだよ？」

「よく考えて……魔力はペニスから発散しないとイケないんだよ」

「それってまさか……」

すぐに一つの答えに辿り着く。

「そう。男じゃ駄目。女の人とセックスしないとイケないの」

アルの口からもたらされた答えは、想像した通りのものだった。

「しかも、ただの女の人では駄目」

が、そこで少女司祭の言葉は止まらない。更に先へとアルは言葉を進めていく。

「ただの女じゃ駄目ってどういうことだ？　そ、そもそもただの女って？」

「ただの女の人はずただの女の人だよ。アルとか、リナリーとかね。まあ、リナリーは女の人っていうよりもメスゴリラだけど」

「なな、なんだとっ！」

ちよつとカチーンと来るが、自分でも確かにそうだなとちよつと思ってしまうところが悲しかった。

「という冗談は置いて……アルヤリナリーみたいなのがただの女の人だとしたら、さてただの女の人でないのは誰だと思う？」

誰か特定の人間の名前を挙げろといっているかの様な物言いである。そしてこの場合思いつく名前など一つしかなかった。

「……せ、セレスか？」

「ピンポーン。そういうこと」

「で、でもどうということだ？」

セレスと自分達に違いなどあるのだろうか？

「簡単だよ。セレスは天界の神に選ばれた勇者だったこと」

勇者と普通の人間の違い、それは魔族を滅ぼすことができるかできないかにある。魔族とは、そこに実在する様でいて、実は存在していない存在だ。肉体とは仮初めのモノにすぎず、その正体は精神＝魔力そのものなのである。そして普通の人間ではこの魔力を消すことはできない。それが可能なのは、この世で唯一勇者だけだ。

「そ、そうか……」

そこまで考えて気がつく。現在起きている肉体変調は、魔族の魔力によるものなのだと
いうことに……。つまり異常増幅した魔力を浄化するには、勇者の力が必要なのだ。

「もう少し早くに気付いていれば、お兄ちゃんとも良かったんだけどね。そこまで症状

が進行しちゃったら、もうセレスに頼るしかないの」

「なるほど……で、でも……セレスは協力して……くれないだろうなあ」

セレスのヤマトへの盲信ぶりは周知の事実である。自分の肉体をヤマト以外に抱かせることなど考えもしないだろうし、どんな理由があるにせよ絶対拒絶してくるだろう。

「アルもそう思う。だからね……策を考えただけど、ちよつと聞いてもらつてもいいかな？ この策ならきつとうまくいくよ」

ニタリツとアルは笑つた。無邪気な少女のものとは信じがたいほど邪悪な笑顔。嫌な予感しかしない。ただ、それでも今のリナリーには聞く以外の選択肢はなかった。表面上普通に会話している様に振る舞っているが、肉棒は今にも爆発しそうなくらいに滾つてしまっている。

「ど、どういう策だ？」

アルに頼る以外に術はない。

*

(ヤマトさん……)

ハアツと溜め息をつきながらセレスは布団の中で何度も寝返りを打つ。城を出てから十日。一度もヤマトに抱かれていない。キスもしていない——欲求は限界まで高まっていた。この状況に追い打ちをかける様に、最近のヤマトは何事もリナリーを優先させてばかり

である。話しかけてもどこか上の空で、ことあるごとに大好きな人は憎い女剣士のもとへと足を運んでいた。

(きつとあれはリナリーさんの策略なんだ。具合悪いふりをしてヤマトさんを誑かたぶらかそうとしているんだ)

許せない——高まる欲求不満により、思考は危険方向へと舵を取る。

(やっぱり今のうちにリナリーさんには消えてもらった方が……)

どす黒い殺意さえ抱く。

(そうだよね。そういう「努力」をしないと、ヤマトさんは私を見てはくれないものね。私の「努力」が足りないから、ヤマトさんは私のところに来てくれないんだ)

ギイッと部屋のドアが軋む音が響いたのは、そうした暗い情念の炎を燃やしていた時のことだった。

(だ、誰?)

今は深夜。こんな時間に一体何者だろうか?

警戒しつつ寝たふりをする。もし敵ならば、近づいてきたところを排除するだけだ——戦術を知らなかった村娘は、ここまで遅しく成長していた。

(——来た!!)

やがて侵入者はベッド脇まで辿り着く。いつでも不意を突いて攻撃できる様、セレスは

右手に魔力を集中させた。

「——セレス」

(えっ!?)

だがその声を聞いた瞬間、集中させていた魔力は一瞬で霧散する。聞き覚えのある声。絶対に聞き間違うことのない声だ。

(や、ヤマトさん……)

ドキンドキンと心臓が脈打つ。愛しい人の声に、勇者は身を硬直させた。

「ごめんセレス。もう我慢できないんだ」

ゆっくりと布団が捲られていく。ヤマトがベッドの中に入り込んできた。ちょうど彼に背を向けるような体勢で寝ていたのだが、そのまま後ろから抱きしめられる。

「はんっ」

たったそれだけの行為で、セレスの口からは甘い声が漏れてしまった。

「や、ヤマトさん？」

愛しい人の名を呼ぶ。

「ごめん。起こしちゃった？」

ヤマトの体温を感じた。彼の鼓動が伝わってくる。ちょうど腰のあたりには、熱い猛りが押しつけられていた。寝間着越しだけれど、普段より大きくなっていることが分かる。

それだけ彼が自分の身体で欲情してくれている——そう考えるだけで、蜜壺からはしとどに愛液が溢れ出していった。

「そ、そんなことないです……。で、でも、いいんですか？ 本当に？」

本当はすぐにでも振り返り、唇を貪りたい。彼に全身を愛撫されたい。それでも彼に問うたのは、後で後悔させたくないからだ。

「うん……。もう我慢できない。セレスを抱きたいんだ。いいかな？」

耳元で囁く様に語りかけられる。

「断るはずがないじゃないですか……」

ゆっくりと向きを変え、ヤマトと向かい合う。愛しい人の顔が吐息が届くほど近くにあった。最早我慢などできない。

「んちゅっ！ ちゅちゅっちゅっちゅ……ちゅずつ、くちゅるるう」

気がつけば自らヤマトの唇に自らの唇を重ね、舌を挿し込む。舌と舌を絡ませながら、貪欲に彼の口腔を貪った。

ちゅば、くちゅばつ、ちゅばちゅばちゅば……。

口端から唾液が漏れてしまうことも厭わず、淫らな音色を奏で続ける。

「んあっ！ あっあっ」

情欲に流されているのは何もセレスだけではない。ヤマトの興奮も限界まで高まってい

る様だった。キスを続けながら、乳房を揉みしだいてくる。余裕がないのか手の動きは乱暴だった。柔肉に指を食い込ませ、こねくり回す様に刺激を与えてくる。

「んひあつ！ あつ、んふううう……」

普段とは違う荒々しい愛撫。ずつと性欲を持って余してきた肉体に、性感を刻み込んでくる。勇者は自然と身体をくねらせ、自ら腰をヤマトの股間部へと押しつけた。

くいつくいつと腰を前後に振り、寝間着越しにペニスに刺激を与えていく。ちょうど自分の陰部に硬い部分を押し当てた。

「はふっ、あんっ、ふうううう……」

腰を振り、猛りを秘部に感じるだけで、肉体の火照りは更に増していく。下着だけじゃなく、寝間着にまで染みができるほど溢れ出す愛液の量は多量だった。

「んちゅぱあ……ハアハアハア……や、ヤマトさん。わ、私もう……」

キスをされ、乳房を揉まれただけであるけれど、情欲をこれ以上抑えることはできない。潤んだ瞳でヤマトを見つめると、愛しい恋人は寝間着を握り、そのまま無理矢理破つてきた。プチプチとボタンが飛び、白い乳房が露わとなる。夜なので下着は着けていない。乳頭部は既に痼^しる様に勃起している。白い肌は桜色に染まっていた。更に彼はパンツを下ろしてくる。露わとなるレースのショーツも、寝間着同様に引き千切られた。

秘裂は完全に開いている。濡れそぼつ花卉。肉穴はクパツと口を開き、牡を求めて媚肉

を淫らに蠢かせている。

これを見たヤマトも自らの肉棒を剥き出しにした。

「すごい……すごく大きくなってます……」

東洋の剣のように反り返ったペニスは、普段よりも一回り——いや、二回りは大きくなっている。ビクビク震える肉先からは、多量の先走り汁が溢れ出していた。

（私の身体に興奮してるんだ……あんなに大きくなるくらいに……）

女としてこれほど嬉しいことはない。自然と自ら足を左右に開いていく。

「い、いくよ」

ぐちゅりっ。

「ひんっ」

肉先を膣口に押し当ててくる。それだけで軽く達してしまいそうなほどに感じてしまう。

（駄目よ。や、ヤマトさんを気持ちよくさせてあげないと……）

膨れあがる快感を必死に抑える。ヤマトを感じさせたい。ヤマトに感じてもらいたい。セレスの想いはそれだけだった。

ずぶっ！ ずぶぶぶ……。ぐじゅうう。

「あ、き、来ました♥ や、ヤマトさんのがわ、私の膣中に……あっあっんん」

ペニスに膣壁が拡張されていく。自分の身体の足りなかった部分が埋められていくかの

様な充足感を覚えた。肉体だけでなく、心まで満たされていく。

「お、大きい♥ ヤマトさんのすごく大きいです♥ あ、も、もう……もう来ちゃいます。こんなの耐えられません。あっひああああ」

先程一度は耐えた絶頂感が再び身を襲う。性感を抑えきることなどできそうにない。

「あた——ぼ、僕ももうっ!!」

それはヤマトも同様の様だった。ズンツと子宮口を肉先が叩くと同時に、ペニスが激しく震え出す。そして——。

びゅぶぽっ！ どびゅっ！ どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅどっびゅるるるっ！

「んひいつ♥ で、射精てます♥ 私の膈中にヤマトさんのがどびゅどびゅどびゅ射精てます♥ あ、い、イクッ！ 熱い。熱くて、イクっ！ イキますうううう♥」

膈中に多量の精液を注ぎ込まれる。子宮内を熱液が満たす。濃厚な子種が肉体に染み込んでくるのが分かった。自分の身体がペニスの一部になったかの様な錯覚すら覚えながら、爆発する快楽に身を任せる。思考がすべて吹き飛んでしまうのではないかと思うくらいの快感だった。

背中を反らし、腰を突き出す。シーツを握りながら、肉体を激しく痙攣させた。

「はあ、はああああ……」

このまま死んでしまっても悔いはないと思えるくらいの充足感を覚える。

「——んひっ！」

しかし、愛しい人は休む間を与えてはくれなかった。射精を終えたばかりの肉棒で、ズンツと再び子宮口を突いてくる。ペニスはまったく衰えていない。それどころか、射精前よりも大きくなっているように感じられた。

「まだ足りないよ。もっと、もっとセレスを味わいたい」
言葉と共にキスをしてくる。

「んふっ……ちゅっちゅっちゅっ……ふはああああ……」

貪られる口腔。舌で脳髓まで掻き回されているかのような気分だった。思考のすべてが蕩けていく。

「はひ……いいれしゅ……やまとしやんが満足するまれ……わらひをあじわって……」
口付けだけで呂律が回らなくなるほどだった。

「うん。いくよ！」

そしてヤマトは腰を振り始める。

ズグッ！　じゅぶぶっ！　ギシッギシッギシッギシッ！！

「奥に来ました！　あつあつ、すごい！　こんなの、我慢できない。ま、またイキます♥
イクッ！　いくいく、イクう♥」

ペニスで肉体が貫かれてしまうのではないかと思うくらいの、激しいピストンだった。

ベッドを壊れてしまうのではないかと思うくらいに軋ませながら、カリ首で蜜壺を掻き回してくる。巨棒で膣壁を擦り上げられるだけで、勇者の肉体は再びの絶頂に上り詰めた。膣壁が猛りを締め上げる。

「くっ！ いいよ。いいよセレスッ!!」

これにヤマトは心地よさそうな表情を浮かべながら、更に腰を振る速度を上げてきた。

じゅばなんっじゅばんっじゅばんっ！

「ひいひいっ！ イッてる♥ 私イッてるのに、また、またイッちやいます♥ だめっ！ だめだめだめだめ♥」

絶頂が引ききらないうちに新たな刺激を加えられる。これが新たな絶頂感となって、勇者の肉体を襲った。

ぶしゃっ！ ぶしゅばあああつ！

「でっる！ 出るううう♥」

失禁でもしたかの様に愛液が飛ぶ。

「いいっ！ ヤマトさんいいです♥ もっと、もっと奥まで、あつあつ、もっと私を突いて下さい♥ もっと、気持ちよくなつて下さい♥」

感じれば感じるほど、愛おしさが溢れ出す。もっと気持ちよくなりたい、もっと気持ちよくなつてもらいたい——発情した獣の様に、セレスは腰を振り続けた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なり、美満の方が多いです。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



二次元エロマガジン

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!



魔法エロマガジン

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



Prism コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの
公式サイトにて! キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!